TADOKU JUNIOR　自然のふしぎ神話　★★★☆☆ ふつう　495語

An Indian Story of the Robin

アメリカ先住みんのコマドリのお話

Flora J. Cooke（1895年の本）　**原文そのまま**　朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　体の弱い首長のむすこは、十一さいになり、ひとりで森の小屋で食べ物をたって、せいれいが来るのを待つことになりましたが……。



When an Indian boy was eleven years old, he was sent into a forest far away from his home.

He had to stay there all alone and fast for seven days and nights.

The Indians thought that at this time a spirit came into the youth which helped him to become a great chief and warrior.

The spirit also told the boy what his name should be in the tribe.

Once there was a fierce Indian war chief who had only one son.

The little boy was not strong, but his father loved him more than anything else on earth.

When this boy was eleven years old, the chief went out into the forest and built a small lodge for him to stay in.

In it he placed a mat of reeds which his good squaw had woven with great care.

By the side of the mat he laid a bow, some arrows and his own great tomahawk.

Next he painted pictures upon the trees along the path leading from the wigwam to the lodge.

He did this that the little boy might easily find his way home.

When everything was ready he sadly sent his son away into the forest.

He missed him so much that he went every morning to look at him.

Each day he asked him if the spirit had not come to him.

Each day the little boy shook his head without opening his eyes.

On the fifth day his son said to him, “Father, take me home or I shall die. No spirit will come to me.”

The old chiefs pride was greater than his pity and he said, “No, my son, you must not be a coward. You shall be as wise as a fox and as strong as a bear.

“Better that you should die than that boy and squaw should cry ‘Shame’ upon your father’s son.

“Be patient, I will come in two days and bring you food.”

The sixth day came and the little boy lay upon the mat white and still.

On the seventh, when the chief came with the sun’s first rays, his son was not in the lodge nor about it.

Above the door sat a bird with brown coat and red breast, which until this time had been unknown to man.

Sadly the chief listened to the bird and understood its message.

“Mourn me not, great chief,” it sang. “I was once your son.

“I am happy now and free.

“I am the friend of man and shall always live near him and be his companion.

“I shall bring the tidings of spring.

“When the maple buds shoot and the wild flowers come, every child in the land shall know my voice.

“I shall teach how much better it is to sing than to slay.

“Chief, listen, chief,
Be more gentle; be more loving.
Chief, teach it, chief,
Be not fierce, oh, be not cruel;
Love each other!
Love each other!”

アメリカ先住みん（インディアン）の男の子は、十一さいになると、家から遠くはなれた森へ送られました。

そこで、たったひとりで、七日七夜のあいだ食べ物をたって、すごさなければなりませんでした。

そのとき、わか者の中にせいれいが入ってきて、えらい首長や、いくさでかつやくする人になる手助けをしてくれると、人々は考えていたのです。

せいれいはまた、部族の中でのその子の名前も教えてくれました。

むかし、とてもあらあらしい、いくさの首長がいました。首長には、むすこがひとりしかいませんでした。

その男の子は体が強くありませんでしたが、お父さんはこの世の何よりもその子をかわいがっていました。

この子が十一さいになると、首長は森へ出かけて、むすこがすごすための小さな小屋をたてました。

その中には、やさしいおくさんが心をこめてあんだ、アシのしきものをしきました。

しきもののそばには、弓と何本かの矢と、自分の大きなおのをおきました。

それから、テント小屋から森の小屋へつづく道ぞいの木に、絵をかきました。

男の子が帰り道をかんたんに見つけられるように、そうしたのです。

じゅんびがすっかりできると、首長は悲しい気持ちで、むすこを森へ送り出しました。

首長はむすこに会いたくてたまらず、毎朝ようすを見に行きました。

毎日、首長は「せいれいはまだ来ないのか」とたずねました。

毎日、男の子は目をとじたまま、首を横にふりました。

五日目に、むすこは言いました。「お父さん、家につれて帰ってください。でないと、ぼくは死んでしまいます。ぼくのところには、どんなせいれいも来ません。」

年とった首長は、かわいそうに思う気持ちよりも、ほこりのほうが大きかったので、こう言いました。「いや、むすこよ、おくびょう者になってはいけない。おまえはキツネのようにかしこく、クマのように強くなるのだ。

「男の子や女の人たちに、首長のむすこはなさけないと言われるくらいなら、死んだほうがましだ。

「がまんしなさい。二日たったら、食べ物を持って来てやろう。」

六日目が来ました。男の子は青白い顔で、しきものの上にじっと横になっていました。

七日目、首長が朝日のさいしょの光とともにやって来ると、むすこは小屋の中にも、そのまわりにもいませんでした。

戸の上には、茶色の上着に赤いむねの鳥がとまっていました。それまで人間が見たことのない鳥でした。

首長は悲しい気持ちで鳥の歌を聞き、その言葉がわかりました。

「えらい首長さま、わたしのことを悲しまないでください」と鳥は歌いました。「わたしは、もとはあなたのむすこでした。

「今、わたしはしあわせで、自由です。

「わたしは人間の友だちです。いつも人間の近くにすんで、なかまになりましょう。

「わたしは春の知らせを運びましょう。

「カエデのめがのび、野の花がさくころには、国じゅうのどの子どもも、わたしの声を知るようになるでしょう。

「歌うことが、命をうばうことよりどんなによいかを、教えましょう。

「首長よ、聞いて、首長よ、
もっとやさしく、もっとあいして。
首長よ、教えて、首長よ、
あらあらしくならないで、ああ、ざんこくにならないで。
たがいにあいし合って！
たがいにあいし合って！」

たんご と クイズ　アメリカ先住みんのコマドリのお話

forest 森	bow 弓	arrows 矢
fox キツネ	bear クマ	bird 鳥
maple カエデ	spring 春	

Q1 男の子は、森の小屋で何日すごすことになっていた？

① 三日　② 七日　③ 十日

Q2 七日目、小屋の戸の上には何がいた？

① 茶色の上着に赤いむねの鳥　② 白いクマ　③ 大きなワシ

Q3 鳥は、何を教えると歌った？

① 弓のうち方　② たくさん食べること　③ 歌うことが命をうばうよりよいこと

こたえ

Q1 ② 男の子は森で、たったひとりで七日七夜、食べ物をたってすごさなければなりませんでした。

Q2 ① それまでだれも見たことのない、茶色の上着に赤いむねの鳥がとまっていました。コマドリです。

Q3 ③ 鳥は「歌うことが、命をうばうことよりどんなによいかを教えましょう」と歌いました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。